

り、何故知っていたのか今もって分からない。しかしそれ悪く、この名前からタケルに、一時盗みの疑い今までかけられてしまふことになった。治療者はこのことによつて、タケルと現実との間の強い軋轢をもう一度気付かされたといえる。タケルが今やっとエネルギーをもつて生きようとははじめたその時に、全く理不尽と思われるようなわけのわからぬ力が、どうしてもそれをばむ形で動き出してしまうような、そんな感じさえうけた。

そしてそれすべてがタケルのもつてている生きる、姿なのと思った時、治療者はあらためてタケルの「生」のすさまじきを思い知り、それに觸れる者としての覚悟を新たにする思いだった。

<第5回> 裏切りピーチ
タケルは大プレイ室にとぶように入室すると治療者へヘルメットをかぶせ、オートバイ乗ったことがある?...
の問いをくり返す。

ピーナツ型の指人形をみつけ、治療者が「ピース」とその人形の名を教えてやると、タケルは自分の手にそれをはじめ、「私ピースよ言って」と治療者に求める。治療者がカシ高い声で言うとタケルはピースにかじりつき、そのままに黙り込む。治療者の目をふさいでキスしてくる。治療者はあらためてタケルの表情には何の変化も表わされていないのを察する。タケルは応答にとまどつてしまふ。

またタケルが急に近寄ってきて「前かけとつ」と言った時は思わず身をまえてしまい、「とれない」と言つてしまつた。するとタケルは治療者のトックリのセーターの首からぞきこんで「下に何着てる?」と問う。これはタケルにすれば「上から見える服の下にいたいあなたは何をまとつているのか。もししかしたら柔かく優かそうなセーターの下にあなたは鋼鉄のよろいを着けているのではないか?」という聞いたたのだろう。だから、「下着」などという答にはもちろん満足せず、タケルはさらにも同じ間を2度くり返した。

タケルは治療者にウルトラセブンと怪獣を持たせ、その両者の戦いを演じろと言う。治療者はいくつもの声色をつかひながら演ずるのだが、自分の中に怪獣もセブンもいて、それが内で戦っているようで時々混乱して声を間違つてしまつ。そしてこの内の戦いや混乱、それを止めらるべき者のいないことなど治療者が演じさせられていることのすべてがタケルの心の中のあり様のように思われた。

タケルは刀で治療者にかかってきて、銃で撃ち、倒れた治療者をなおも刃で突く。治療者がたまらずに反撃しようとすると「まだあかん! 爆発するの。先生爆発してバラバラ死んで、もう起きんといいて」と言う。それからタケルはふと「先生何て名前?」と聞い、(何て名前がいいの?)と問ひ返すと「B! 先生知ってる?」と言ふ。^{*}また、「先生スキーやった? 誰と? 何人と?」「先生他の人とも会ってるの? 今遇会った? 先週は?」など治療者の現実性を確認しようとして、治療者を独占したいかのような発言もみられた。終了時はまだ窓口でT先生とジャレでから届つてゆく。

* このBという名はタケルとは何ら関係のない名であ

し、怪獣を箱庭の上につみ上げると、「先生オートバイの? ヘルメットかぶる?...」とたてつづけに質問。次いで、「T先生どこ?」(今日いかつた?)「いなかつたよ、どこ?」(何か用があつたのね)「どんなん先生? 受付の先生?」(そうね。好き?)「T先生ボクと遊ぶ?」(ウーン、タケル君とは遊ばないよ)「どうしてT先生は遊ばないの?」(タケル君は私と遊ぶの。T先生は受付の先生)とたんに「T! このやろう。Tババア!」と中腰になつた治療者にワッとばかりにのしかかつてくる。そして治療者のひざの上にすわり、ヘルメットで治療者の目をふさいでキスしていく。直接このキスには治療者も驚いて「ダメ!」と顔をそむけると、タケルはほほにかみつく。そこかと思うと、こちらが思つてもいない時に突然治療者の頭をなぐることがある。力も入つているのだがタケルの表情には何の変化も表わされていないので治療者は応答にとまどつてしまふ。

またタケルが渡し、「これ誰?」と問う。(ウルトラセブン)「ウン、誰?」(私でしょ)「何で?」(タケル君がそう決めてくれたのね)「ウン」とタケルはニッコリ笑つた。そしてタケル自身は怪獣を持ち、治療者のウルトラセブンと戦わせては自ら負けてゆく。治療者にはそれは戦いというよりもそれがかかつてくる。タケルはウルトラセブンにやつけてきた。タケルはハリスボックスに入るとその窓を舞台のよう見立て、治療者と鏡をして指人形のウルトラセブンにやつけていた。タケルはハイムシ仮面が怪獣にやられて窓から落ちかけ、そこに、助けに来たのか追いうちに来たのか不思議なネコ怪獣が来てイモムシ仮面を連れて窓の中に入る。そのまま出てこないので治療者が「どうしたの?」と聞くと、タケルはひとこと「死んだ」と言って終り。そしてハリスボックスの窓から怪獣やウルトラマンの手・足・首をちぎつては窓の外に放る。タケルが怪獣をもつて「かかってこい!」というので治療者のセブンが「ウオーウォー」と言いながら行くと、「ウォー言わん」といて。

「ウルトラセブンだ、かかってこい!」と言うて」セリフをあげて笑う。タケルは何度も「ウォー言って」と叫ぶ。治療者が「ウォー」と言うとその口を離かめどせがみ、治療者としてはそのどちらも、そういうにして面の上からリバリストかみついてくる。それはキスをしているとも、かみついているともうけとれるものであったが、治療者としてはそのどちらも、そうやすく受け容れて応答できるものではなかった。しばらくかみついているがスッと離れ、治療者から遠い柵のあたりでゴソゴソと怪獣をいじったりにおいてかいだりしている。思わず近づきすぎてしまった治療者との距離を修復しようとしているかのようだつた。

<第4回> 先生これまでよ」とウルトラセブンの「先生これまでよ」治療者に手をまわしてぶら下がり、ケラケラと声をあげて笑う。タケルは怪獣の手足や首の怪獣にすげ換えをして、それによつて無数の怪獣を新しくつくり出すことができるわけだが、治療者は形にも増してその色の不気味さに沈黙してしまつた。その間に「T先生の生年月日いつ? どんなん先生? 受付の先生?」という会話があつた。

以後終了時刻までタケルは怪獣の手足や首の怪獣を教える。以降は怪獣を新しくつくり出すことができるわけだが、治療者は形にも増してその色の不気味さに沈黙してしまつた。その間に「T先生の生年月日いつ? どんなん先生? 受付の先生?」という会話があつた。

ウルトラセブンを治療者にもたせ、タケルは怪獣を一匹づつセブンに挑戦させてはやられていって、怪獣は全員砂場にうず高くみ上げられる。これまで怪獣をやつつけ終つたとウルトラセブンの治療者がホッとしたその時、タケルはピースを持ち、「私ピースよ」とセブンの近くまで来ると、とたんに「ピースちゃん裏切つた!」と叫んで治療者のもつセブン達を皆殺しにし、「怪獣全部生きて返る!」と宣言した。治療者はこのあつとい間の逆転劇にあっけにとられてしまう。からうじてセブンが1

して何度も治療者に刀で切りつけたあと、タケルは急に小刀を取り出し、セーターをまくりあげて自分の胸に突き当た。治療者は一瞬その迫力に絶句したが、いたまれなくなり、とんでもないタケルの体をかかえて「死んだら死んだら死んだら死んだよ!」と呼んだ。タケルはキヨトンとしてしばらくじっと沈黙していたが、やっと「真似してるだけや」と小さく言う。

終り近くになってタケルは「先生いつまで会うの? ずっと? 僕が中学に行つても会つてくれる?」と問う。

治療者は一度裏切られたタケルの痛みを感じながら「ずっとよ!」と答える。

<第3回> 怪獣をやつつけて!
タケルは大プレイ室にとぶように入室すると治療者には、治療者の手に抱きつくようにして、大プレイ室に立つて質問し、治療者のひざの上に抱きつくようにして、治療者を教える。治療者に黒ながら、1つ1つの名前を治療者に教える。治療者に黒いヘルメットをかぶせると、「オートバイ乗つたことある? 何色? 手袋する? 黒のジャンパー着る?」とたてつづけに質問し、治療者のひざの上に抱きつくようにして、治療者もかかつてくる。タケルはウルトラセブンの「ウン、はははにかみつく。そこかと思うと、こちらが思つてもいない時に突然治療者の頭をなぐることがある。力も入つているのだがタケルの表情には何の変化も表わされていないので治療者は応答にとまどつてしまふ。

またタケルが渡し、「これ誰?」と問う。(ウルトラセブン)「ウン」とタケルはニッコリ笑つた。そしてタケルは怪獣を持ち、治療者のウルトラセブンと戦わせては自ら負けてゆく。治療者にはそれは戦いというよりもそれがかかつてくる。タケルはハイムシ仮面を連れて窓の中に入る。そのまま出てこないので治療者が「どうしたの?」と聞くと、タケルはひとこと「死んだ」と言って終り。そしてハリスボックスの窓から怪獣やウルトラマンの手・足・首をちぎつては窓の外に放る。タケルが怪獣をもつて「かかってこい!」というので治療者のセブンが「ウォーウォー」と言いながら行くと、「ウォー言わん」といて。「ウルトラセブンだ、かかってこい!」と言うて」セリフをあげて笑う。タケルは怪獣の手足や首の怪獣を教える。以降終了時刻までタケルは怪獣の手足や首の怪獣を新しくつくり出すことができるわけだが、治療者は形にも増してその色の不気味さに沈黙してしまつた。その間に「T先生の生年月日いつ? どんなん先生? 受付の先生?」という会話があつた。

ウルトラセブンを治療者にもたせ、タケルは怪獣を一匹づつセブンに挑戦させてはやられていって、怪獣は全員砂場にうず高くみ上げられる。これまで怪獣をやつつけ終つたとウルトラセブンの治療者がホッとしたその時、タケルはピースを持ち、「私ピースよ」とセブンの近くまで来ると、とたんに「ピースちゃん裏切つた!」と叫んで治療者のもつセブン達を皆殺しにし、「怪獣全部生きて返る!」と宣言した。治療者はこのあつとい間の逆転劇にあっけにとられてしまう。からうじてセブンが1

人だけ生き返ることが許されるとそこに再びピーチ子がやつてくる。セブンが「お前はピーチ子じゃない。裏切り者はだ」と言うと、タケルはピーチ子の声で「あの悪いピーチ子は私の心から抜けました。もううちがピーチ子です。仲間にして下さい。」と言う。そこで治療者が「よし、では仲間になってくれ」というと近づいて来、すぐそばまで来たときに「ハハハ…。実はお前をやつけるために来たんだ」とセブンのうしろから攻めてセブンをやつけてしまった。と、突然タケルはピーチ子の手と首を胸からはずして砂の上に落とし、それを「死ね！死ね！」と思いつながら踏みつけはじめた。はじめて治療者は制裁しているのかと思って見ていたが、そのうちにタケルの表情がこわばって、タケル自身のコントロールの弊を出している様相が感じられてきた。治療者は、このままピーチ子を殺させてはたいへんなことになると直感し、やはりピーチ子が「私は味方よ。お友達になりましょ。」とやってきて、セブンに抱きつき、キスせめにしたかと思うとアッという間に裏切り、怪獣に変身してセブンをやつけるというバーン。セブンが追跡してゆき、今にも追いつきそうになるとピーチ子はクルリと方向を変え、「私ピーチ子よ。お友達でしょ」と言うので、治療者のセブンは、一体ピーチ子は敵なのか味方なのか、信じていのいかれれるのかさっぱりわからなくなる。わからないままにセブンはやられてしまい、タケル自ら終了を宣言してさっさと退室すると、窓口でT先生とイナイナイバーをしてよろこんでいる。治療者としては、やはりいい気はない。

<第7回> ロボコン

遅足のため10分遅刻して来所したタケルは「今日は6時何分まで？」とやや堅い表情で問い合わせる。タケルはこれまで普段はプレイ室しかあるようなチックがみられる。カエルや宇宙怪獣等の分類名をかいだり、体をとり出さない。治療者にセブンとその仲間を渡し、タケルは治療者のひざにすわってそれらの人形にかじりつたりキスしたりしていたが、スキをねらって治療者のほうをもねねろうとする。その手を払われるとタケルは立ち上がりてそこにあつたロボコンを「これ先生や」とふりまわしあはじめ、それが次第に柔道かレスリングのような様子になる。治療者が「1本！」といふと、うれしそうな子供らしい笑顔を見せた。タケルは治療者に、左手にもつたピーチ子でロボコンを、右手にもつたカエルとゴドラ（いすれも人間型の怪獣）でタケルを応援するよう言い、30分余りの試合の間中、治療者は様々な声色で応援をつづける。結局タケルが勝つと今度は、ゴドラ

療者がいくら「ピーチ子痛いよ。死んじゅうよー」と叫んでも、タケルは一向にそのことに耳を貸す風はない、仕方なく治療者がピーチ子を奪うと今度は治療者自身へ攻撃が向く。

治療者のほほをつねろうとするタケルの手首をつかまえると、タケルは「好きなことやらせて！」と叫んだ。初回に「ここは何でもタケル君の好きなことをやっていい」と言った治療者は一瞬絶句し、「負けた！」と思うがしかし、治療者自身人間である以上、どこまでも許すわけにはいかない。心の中で「ゴメンネ」と言ひながら不思議なほど治療者への激しい直接攻撃は止まった。再び治療者にセブンをもたせると、前回と同じようにタケルは1匹づつ怪獣を挑戦させてはやられてゆく。そしてほとんどの怪獣がやられた時、やはりピーチ子が「私は味方よ。お友達になりましょ。」とやってきて、セブンに抱きつき、キスせめにしたかと思うとアッという間に裏切り、怪獣に変身してセブンをやつけるというバーン。セブンが追跡してゆき、今にも追いつきそうになるとピーチ子はクルリと方向を変え、「私ピーチ子よ。お友達でしょ」と言うので、治療者のセブンは、一体ピーチ子は敵なのか味方なのか、信じていのいかれれるのかさっぱりわからなくなる。わからないままにセブンはやられてしまい、タケル自ら終了を宣言してさっさと退室すると、窓口でT先生とイナイナイバーをしてよろこんでいる。治療者としては、やはりいい気はない。

<第8回> ピーチ子を襲え

入室するとすぐ治療者にピーチ子をもたせ、タケル自身は怪獣を分類してキチソと並べる。ロボコンと柔道をはじめるので治療者はピーチ子・ゴドラ・イカルスで応援。タケルは自分の応援を増やすように要求し、ついに応援團ができ上がり、その团长にウインダムがなる。15分程の格闘の末、ロボコンの空気を抜いてペシャンコにしてしまうことでタケルの勝利。するとタケルは治療者に、左手にもつたウインダムで右手にもつたピーチ子を泣かすように命ずる。治療者は2役を演じながら、自分は一休どちらに同一視してどちらに取扱したらいいのかわからなくなってしまう。ピーチ子がいつもでもやられまいとがんばることも、逆にピーチ子が全くうちのめされてしまっても、どちらもタケルの求めているものではないよ。うとも、どちらもタケルの相手であつたゴリラがゴナゴナになってしまふや否やピーチ子の裏切りが再燃してしまう。このピーチ子の裏切り（ウルトラマンを助けて活躍するが、その戦いの相手であつたゴリラがゴナゴナになってしまった）は軽妙で、しかもタケルは「ピーチ子の顔、先生そっくりや」と言うので、治療者はウルトラマン側としてその裏切りにクタクタにならばかりでなく、自分が今までタケルを裏切ってきたすべての人の身がわりにならなければならないとの重荷を感じてフランになってしまいます。しかも、ピーチ子の声、変身してウルトラマンを襲う時の怪獣の声、そして襲われるウルトラマンの声と全部を治療者が出すのだから声も枯れてしまう。

そんな中でもウルトラマンはがんばって（心の中では何とか裏切りが止んでほしいと思って）「ピーチ子ちゃんは僕の友達だ。ピーチ子ちゃんの体を奪った怪獣め、出て行け。僕はピーチ子ちゃんがどんな姿になろうと信じている」と言うのだが、ピーチ子の裏切りは一向におさまらず、治療者は、タケルの、裏切りに対する痛みの深さに

とイカルスがピーチ子をいじめるようにと言う。治療者はいじめる側もいじめられて泣くピーチ子も同時に泣じなければならぬ。そのあと、ロボコンを助けに行つたピーチ子をタケルは砂場に投げ、ゴドラとイカルスを持ち近づいてゆくが、タケルはピーチ子を持ち、ピーチ子の裏切りが再開される。ピーチ子はゴドラやイカルス（治療者側）を襲つてはまた無力のピーチ子に戻つて助けを求め、助けに行くとまた変身して襲つてくるということのくり返しである。

終了を告げると、ピーチ子・イカルス・ゴドラの3体のみを箱庭にそっと残して退室。窓口でジャレたあと、はじめドアからT先生に「サヨナラ」を言って帰る。

<第9回> ピーチ子の顔、先生そっくりや

入室するなりタケルは腕時計を見せてうれしそうに「これ15000円の時計や」と言う。かごからネズミ・ワニ・カメ・ヘビなどをとり出し、治療者に、「カメはハ虫類やね。甲らとったらハ虫類に見えるものね。ワニもハ虫類。ヘビもハ虫類？」と語りかけ、スッと近寄るとひざにわかる。「ピーチちゃん泣くの」と治療者に要求し、ピーチ子の泣き声を出すとケラケラ笑う。ピーチ子とウインダムが仲よくしていると、タケルは鉛をとり、ウインダムに走りよるピーチ子を撃ち、「ピーチ子は死んだ」と宣言してしまう。その後、ピーチ子は生き返つてウルトラマンと仲間になり、しかもピーチ子自らウルトラマンを助けて活躍するが、その戦いの相手であつたゴリラがゴナゴナになってしまふや否やピーチ子の裏切りが再燃してしまう。このピーチ子の裏切り（ウルトラマンを助けて呼んでは怪獣に変身して襲う）は軽妙で、しかもタケルは「ピーチ子の顔、先生そっくりや」と言うので、治療者はウルトラマン側としてその裏切りにクタクタにならばかりでなく、自分が今までタケルを裏切ってきたすべての人の身がわりにならなければならないとの重荷を感じてフランになってしまいます。しかも、ピーチ子の声、変身してウルトラマンを襲う時の怪獣の声、そして襲われるウルトラマンの声と全部を治療者が出すのだから声も枯れてしまう。

なすべを失なってしまう。タケルが「シットリ、シャッキリ」とコマーシャルソードを言った時に治療者がすかさずそのコマーシャルソングを歌うとタケルは「知つてゐるの？」と目を細かせてピーチの頭にかじりつく。^{*} タケルはピーチの声をすべて治療者に要求するのだが、治療者としてはピーチが婆身せずにウルトラセブンを襲う時だけはどうしても声を出せなかつた。

時間終了後春休みのことと言ふと「それで終わり？」と意外な問い合わせてきた。治療者はあわてて「ウウン、またズーッと会うのよ」と説明する。今回もドアを開けてT先生に「サヨナラ」を言ってから帰つてゆく。

＜第10回＞ ピーチ自爆
治療者の右手にウルトラセブン、左手にピーチ子を持たせ、セブンが「仲よくしよう」と言って近づいたと思うや、タケルはピーチの首を怪獣のものとすげかえしてしまう。同時に治療者が「ウハハ、だまされたなセブン！」と怪獣の声を出すわけである。セブンはピーチの体を借りた怪獣どもを次々とやつけるが、時々ピーチの姿のままで近づいてくるのは疑ひきれずに近寄つてしまふ。するとバット首がかわり「ウハハ」である。最後にはピーチの頭だけで襲つてきて、ツバや畳吐物でセブンをせめあたてたあと、ついにセブンの背中に喰いつくと、タケルは急に「あと1秒で爆発、ピーチ子はセブンもろとも自爆してしまった。するとタケルはこわばつた表情でさっと立ち上がり「もう出る！」と言ってサッサと部屋を出てゆく。「Tババアのところに行つてくる」と言って窓口に行き、T先生が出てくると、はじめて面とむかつて「Tババア」と言って逃げてくる。このプレイ室内の守られた世界と外界、その安全弁としてのT先生という境界の混乱(直接に悪口を言つてしまつたこと)に、治療者はピーチが自爆したことの意味の深さを痛感し、緊張して次の瞬間を待つた。

タケルは「ピーチ子は死んだ。裏切り者は死んだだから怪獣も死んだ。埋めよう」と言うが硬直したように立ちすくみ、治療者が穴を掘つて埋めるのを見ている。そしてこのコマーシャルはピーナツのコマーシャルでピーチの首ももちろんピーナツの形をしている。

** この首をピーチの首とすげ替えることで変身するわけである。

*** タケルの生れたのは3月某日である。

すぐ待合室に出て「ピーチ子は死んだ。怪獣も死んだ。世界に平和が来た。」と言い、今度は治療者に確かめるように「ピーチどうした？」と問う。(死んだね。自爆した)「どうして自爆したん？」(ピーチ子がいると怪獣がピーチ子に化けてウルトラセブンを襲うから、ピーチ子は死んだ)「ピーチ子と一緒に誰死んだ？」(怪獣も死んだね。ピーチ子が死んだから怪獣も死んだ)「どう。もう裏切れない」「ピーチ子死んだね、怪獣も？」(そう。もう裏切れない)「ウン。」とやつとタケルがピーチ子と怪獣の死を確認して待合室の椅子にすわるとすると、椅子がぬれしている。タケルはそこに触れた手を開いて治療者に見せ、「ピーチ子の血」といった。あたかもマクベス夫人が、殺した者の血が洗つても落ちないと強迫行為の中で示した如くである。別のところに触れて「ピーチ子のウンコ。ピーチ子の血」といい、触れるところすべてに「血」を見ついで待合室にいられず、ドアの外で母親を待つ。痛ましい姿だった。

＜第11回＞ ピーチちゃん儀にもサヨナラ言って…(治療者はピーチ子をどうしておいたらいか迷つたが、結局、首を体にもどして再生させ、プレイ室の目だため所に置いておく。)
タケルは入室すると砂場を掘りはじめ、ピーチ子が埋まっていることを知つてか「ピーチ子どこ？」と聞く、治療者がいる場所を示すと「ピーチ子生き返ったの？誰が生き返らせたの？」と問う。治療者は、また裏切つてしまふ。するとバット首がかわり「私が生き返らせたの」と言う。タケルはピーチ子を治療者の手にはめると、自分は怪獣の首をはずしにかかり、その首を持って治療者の儀に椅子を持つて来てすわる。文字通り「ひざからおりだな」という感じ。

治療者の右手にウルトラセブン、左手にピーチ子を持つてまずピーチ子の生還を喜ぶが、すぐまたピーチ子の変身、裏切りがはじまる。治療者がセブンの声で「裏切るピーチちゃん嫌い」と言うと、タケルは「好きになつて」と言う。その声は悲しそうで、治療者は「裏切ろうと思ふ」と好きだ」と言ってやらねば…と思うのだが、どうしてもそこそこが出来ない。

タケルが「怪獣はピーチ子の体だけを借りているのだ」と助け舟を出してくれたので、治療者も「心まではかさないぞ」とピーチ子の声で言う。しかも執拗に鏡く裏切り者があえてしないことにする。換言すれば、治療者はその回ごとの記述の中に治療者の感じたこととして、ある。

シャルソングを歌わせると、偽もののピーチ子は途中で声がつまつて歌えないといふものである。そして偽ものとわかったからはセブンは容赦なくやつつけ、全部の怪獣をやつけてしまうとピーチ子と共に平和な世界を見てまる。2人でウルトラセブンの歌を歌いながらプレイ室を一周した。が、あたかも抗しがたい力につきかされるように、ピーチ子はセブンに襲いかかる。ピーチの首がセブンの背にかみつき、そして自爆してしまつた。治療者は一瞬緊張する。

しかしつかは前回と同じでその場から逃げ出さず、自分の手でピーチ子の体をちゃんと元に戻してやると、自ら墓穴を掘りはじめた。穴の底にピーチ子をていねいに横たえると砂をゆっくりかけはじめ、治療者に「さよなら言って」と求める。治療者が「さよなら。みんなさよなら、セブンさよなら。もう怪獣が私に化けてあなたを苦しめることはありますんよ。」と言うと、タケルは「ボクにもさよなら言って。タケル君さよなら言って！」と言う。治療者は胸がつまる思いで「タケル君さよなら。もうタケル君を苦しめないよ。さよなら…」と言う。タケルは静かにピーチ子に土をかぶせてゆく。すっかり土をかぶせて、ていねいにおさえたあと、タケルは紙に「ピーチのほか」と書き、土の上にさして退室していく。

その後の回は母親のみが来室し、タケルからの手紙を治療者に手渡した。手紙には「中学生に入り、クラブも入部できた。勉強がおもしろくて、また宿題も多くて時間がないので終りにしたい」旨が書かれてあり、治療者はタケルの意向を汲んでその回で終結とした。もちろんタケルが再来するなり限り再会する覚悟をもつてゐる。であり、それからタケルを守る力が今、治療者にははないのであるから…。

この事例に対してDr. B. Beiterheimは次のことをばけた。このことばを本稿の結びとしたい。
You really saved his life, but you didn't teach him how to live the life.

藤繩論文へのコメント

大阪市立児童院 山口敏郎

怪獣のみを用いてタケルのような展開を示した児童はもう少し年少のものが多かつたようである。ただ3回といふ。セブンも怪獣もピーチの声もすべて治療者が出しているので、タケルがそう指示したのか治療者がそうしたのか今となつては全く不明である。

怪獣の世界との戦い

う少ない回数でつまりのある経過を示していること、タケルの学校での問題題、家庭の問題を考慮に入れるとなつて、怪獣が用いられたこと（タケルが選んだのか、治療者がそうしなけたのかが明らかではないか）もそう不自然ではないようである。

タケルの治療経過を読んでいくと、筆者の職場に8歳7カ月から1年10ヶ月間在所し、167回の個人治療を受けたTを思い出す。Tは幼稚園入園当初より落着きがなく、就学校後も教室内をうろつき、授業を妨害し、運動的に他児に乱暴したり、理由もなく不安に陥り、たえず性器をいじったり、雑巾を口にしたりしていた。知能指數は鈴木ビネ法でIQ71であった。ベンダー・ゲミュタルト・テストではコピック法で15点を示し、発達年齢は8歳9カ月時に5歳であった。一時期同居してTに好かれている祖父は、ある宗教を信奉しており、本児の問題は父親の幼稚期とまったく同じで、成長すると改善されると確信していた。父親はTの問題行動を治すために紐で縛ったり、たたいたりしていた。母親はルースで夫や子供の世話を十分にできなかった。Tの入所中に両親の離婚も話題になった。怪獣での遊びは入所後1年4ヶ月頃から退所まで続いた（治療の第136回から107回まで）。Tの怪獣遊びは治療の終結へ向かっての整理の段階に相当し、その前130回近くの長い準備段階が必要だった。タケルは13回の治療でTが2年近くかかって積み上げていったものを達成しているようである。Tの怪獣遊びにまで至る治療の経過を簡単に追ってみると、まず治療開始から5カ月間は、主として空間的および時間的なフレームの中で自分の位置の確認に費やした。例えば、治療組が初めてプレイルームの中で少しずつ遊ぶようになる前に、次のレゴやプラレールを用いて遊び（4カ月）に発展していた。この時期には簡単なゲームのルールも理解でき、太陽や雷などの自然現象に対する恐怖や疑問が生じてきた。またレゴでは風呂を作ったり、不完全ながらも家を作るなど、自分の生活する空間を遊び（水と砂）が主となった。この時期の終わり頃には砂の感触を楽しむと同時にトランプを手の中でもて遊ぶようになり、次のレゴやプラレールを用いて遊び（4カ月）に発展していた。この時期には簡単なゲームのルールも理解でき、太陽や雷などの自然現象に対する恐怖や疑問が生じてきた。またレゴでは風呂を作ったり、不完全ながらも家を作るなど、自分の生活する空間を遊び（水と砂）が主となつた。Tの場合、この3つの段階を経てはじめて怪獣が登場してきた。まず最初に怪獣の名前をしつこく教える。次に種々の怪獣の手足をもぎとり付けかえる。手や足がとれると血が出るか、痛いか、怪獣は男の子の玩具か、人形は女

の中に統合することはできず、自己の内の善と悪だけの戦いに終つた。タケルは、回数の少なかつることもあって、自己の幼稚期の経験や家族の問題を怪獣遊びを用いて意識化するまでには至っていないようである。

これまで、Tとタケルを対比しながら見てきたが、怪獣遊びには、怪獣遊びそのものを成立させるような認識の発達の側面と、自己や幼児期の経験をそこに投影せざる場としての側面とがある。モード・マーニーは「子どもの精神分析」（山口譯、人文書院、1978）のなかで精神運動発達の障害、書字などの学習の障害、空間や時間の構造化の障害などについても2つの側面を区別している。1つは発達の障害のみが認められる場合であり、他の発達の障害が幼児期の体験や家族の問題を知らせるメッセージである場合である。前者では治療者は子供の対人関係にまで立ち入らないで治療教育のみを行なうことができる。後者では症状を文字通り受け取らないで、症状の背後に隠れている問題を解説する必要がある。Tの場合は、このように問題を2つに区別することも可能だろ

うか。筆者にはそろは思われない。Tは知能も低く、多動で特殊発達障害と考えられる側面もあるが、幼児期の外傷体験や家庭の複雑な問題も認められるし、怪獣の遊びを通してそれらを表現している。タケルの場合、この報告では怪獣の遊びの経験は要領よく把握されているが、怪獣遊びの発展や治療者との関係は述べられているが、それと、タケルのこれまでの発達の過程および家族の問題との関連が考案されていないのは少し残念である。

幼児期から種々の問題を持ち、種々異った治療機関で治療を受けている子供の場合には、治療経験も含めてその子の発達の過程を、今行なおうとしている治療に生かしていくなければならない。タケルとTは両者とも同じ時期に同じような取容治療の経験をもっているようである。タケルの知識や発達の過程については何も書かれていないが、もし仮に両者の立場を交換し、Tを我々の施設での治療後に、この報告のように治療し、タケルにTのような取容施設での治療経験を想定してみることも可能なようと思われる。

タケルの怪獣を用いての遊びも、怪獣の名前をあけること、治療者に名前を付けること（あんたはナナシ）、治療者の生活についての質問、治療の期間、他児についての確認、怪獣の首のとりかえなどがA治療者の期間も含め6回続いている。この期間にタケルはTがほぼ1年半を費して構築していくた怪獣遊びの舞台を準備している。また一般にこの時期には子供は治療者に物の名前を教えてもらったりするが、治療者との遊びや教えたり、教えてもらったりするが、治療者との遊びややりとりはあまり好きで、タケルとTの両方に認められるように、「先生は黙っててな」と発言することが多い。幼児期に混沌が大きくて、実生活を通して外界を把握することのできない子供はプレイルームという小さな世界の中で自分の自由になる素材を用いて外界を認識する方法をさがし出す。自分の居る場所や時間さえも確認することが必要なほどTの外界把握は混沌としていた。児童分裂病という診断を付けられていた12歳の男の子ではWISCの言語性知能はIQ120と高いにもかかわらず（動作性知能はIQ80）、ピアジェの言う空間や時間の保存はまだ獲得されていなかった。後の描いた自分の家の見取図では部屋を区切る壁もなく、平面図と立体図が混在していた。我々は自分の身体を用いて外界を知り、時間や空間を構造化していく。タケルは壁に頭を打ちつけたり、手を噛んだりしている。治療者が圧倒されるほどの迫力で刀をつき立てたり、感情を伴はないまま強い力で治療者になぐりかかたりする。

第5回の治療からピーターが登場し、死と再生のテーマがくり返され、善と悪の戦になる。最終回では真切り者のピーターを正義の味方ラトルセブンに敗北させ怪獣をやっつけるというところで終つている。ピーターはタケルにとっては正義と悪のどちらにでもなりうるものであると同時に治療者（他人）を知る手がありとして利用されている。自己の内で正義が悪に勝ち、治療者が自分に悪意を抱く者でないということを知って、偽のピーターの理辦とピーターの再生が治療者に導びかれて行なわれる。Tは怪獣の内に母親をみたが、治療者（他人）を怪獣遊び